エピクロスの神と原子論的救済

佐々木光俊

0. はじめに

エピクロスは古代原子論の完成者として、また17世紀にガッサンディがキリスト教に調和する形で原子論を復興させるときに準拠したモデルとして知られている。[1] そしてプラトンやアリストテレスとは全く異なった古代ギリシアの思想家というだけでなく、近代の原子論と経験論の源流として巨大な存在である。その一方で、彼が提示する世界像は現在の原子論的描像の素朴な形態であることからくる分かりやすさもある。世界の根底には原子と空虚しか存在せず、すべての集合体は無数の原子の偶然的な衝突の結果として出現し別の姿へと転じていくという描像は、古典的な原子論の描き出す世界の典型的な姿であろう。

しかしこのエピクロスは神の存在も説いている。原子と空虚しかないはずの原子論のどこに神の入る余地があるのだろうか。原子論には無神論こそがふさわしいのではないだろうか。確かに近世ヨーロッパの原子論者たちは、原子の創造者として神を導入することができた。しかし古代ギリシア人にとって創造とは矛盾でしかない。古代ギリシア人であるエピクロスはどのような神を考えていたのであろうか。本稿の主題はそこにある。無神論でもヘブライ的神でもない神の姿とは、同じ原子論の時代に暮らす現代人にとってもそこに何がしかの示唆を予感させるものがある。

エピクロスには多くの著作があったことが知られているが、そのほとんどすべてが失われている。[2] われわれが今日エピクロスの考え方をある程度再現できるのは、ディオゲネス・ラエルティオス（250年頃）が『哲学者列伝』の第10巻にエピクロスの三通の手紙と『主要教説』と呼ばれる箴言集を収録しているからである。特に三通の手紙はエピクロス自身によって弟子にむけて教説のエッセンスを伝えるべく書かれたものである。そして「きわめて

概略的なものであっても、わたしの学説の概要が正しく把握されて記憶されているのであれば、個々の特殊な事柄についての精確な知識もすべて見出されるであろう」[3] DL. X 36 と記している。つまりそこに書かれていることは単なる要約ではなく、エピクロス的に考えるための要素を提示しているというのである。このことはわれわれもその手紙や主要教説を学び展開させることでエピクロスの徒になりうることをエピクロスが保証しているといってもよい。エピクロスの著作のほとんどすべてが失われたとしても、このエッセンスを通してある精度をもって復元することが可能となる。これはエピクロステキストのもつ特殊な性格である。

われわれは以下において資料を欠く場合、このエッセンスから導出可能なことがらも積極的に活用していくことにする。エピクロスが語り、書き残したことだけがエピクロス哲学なのではなく、エッセンスである『小摘要』や『主要教説』から導き出されることがらもエピクロス哲学であるとすることが許されると考えるからである。[4]

1. エピクロスの神

エピクロス自身の語る神々の特徴をみておこう。

> 「まず第一に、神々についての共通な観念が人々の心に銘記されているとおりに、神々は不滅で至福な生きものであると信じて、神の不滅性とは無縁なことも、またその至福性にふさわしくないことも、何ひとつ神に押し付けてはならない……というのも、神々は確かに存在しているし、神々の認識は明瞭な事実だからである。」DL. X 123

もう一つは『主要教説』の第一に掲げられている。

> 「至福にして不滅なるものは、そのもの自身が煩いをもつこともなければ、他のものに煩いをもたらすこともない。したがって、怒りにかられることもなければ、好意にほだされることもない。なぜならそのようなことはすべて、弱い者にのみあることだから。」DL. X 139

これがエピクロスが神について明示的に語っているすべてである。ここか

ら明らかになるのは、エピクロスが神は存在する、それも複数存在するとしていることであり、その特徴は、不滅（ἄφθαρτον）と至福（μακάριον）であること。さらに神は生きもの（ζῷον）であるとしていることである。[5)]

エピクロスにとって「生きもの」がどのようなものであるかから確認していこう。生物全般についての記述は伝えられていないが、人間についての説明から概要を知ることができる。

その特徴は物体である身体に加えて魂（ψυχή）を持っていることである。そして原子の集合体（σύγκρισις）である身体は魂を内包することで感覚をもつことができる。身体自体は感覚をもっていない。原子論者にとって、魂は身体に影響を与え、また影響される以上、非物体的であることはできない（非物体的なものは空虚しかない）のだから、魂も原子からなる集合体である。素速く動く微細な原子群によって魂は構成されている。そしてその一部は身体全体に拡がるが、多くは胸部に局在していると教えている。身体は、この微細な原子を包み込む特殊容器となっている。そのため身体が破壊されたり、分解してしまえば内包されていた微細粒子は漏れ出し、拡散していく。これが死の姿である。

エピクロスの魂―身体観でまず強調されているのが感覚の出現という点である。エピクロス哲学において決定的な役割を担わされている感覚は、魂と身体の複合体においてのみ可能となっていることが重要である。エピクロスにとって魂とは身体とともにしか出現しない物質形態であって、単独で分離したり、存続したりすることは否定されているのである。肉体の死後、魂だけが残ったり、生きている間に身体を抜け出したりということは一時的であれ不可能であるということになる。このような考えは古代ギリシアにおいて極めて特殊であるといわざるをえない。

以上のことから、神が生きものであるとされる以上、神々は魂―身体複合体であらねばならないこと、つまり神々は身体を持っていることが導かれるのである。そして原子論にたつかぎり、神々ももちろん原子からなる集合体であらねばならない。神々を「生きもの」としたエピクロスであるが、少なくともエピクロス派ではさらに神々は人間の姿に似た形姿をもつと考えられていたらしい。

キケロの『神々の本性について』では、エピクロス派のウェッリウスに対してアカデメイア派のコッタが登場してエピクロス派の神概念に批判を加え

る。このコッタの批判で注目すべきはエピクロス派の神人同形説に対して執拗に論難していることだ。エピクロス派の特徴的な考えとみなされたのであろう。

ウェッリウスの主張は次の三点である。

「いかなる民族であれ、人は皆、自然によって神々が人間と同じ姿をしていると考えるものである。」ND. I 46

「もっとも卓越した本性をもつ存在――それが幸福だからにせよ、永続性をもつからにせよ――は、もっとも美しいと考えるのが妥当であるが、いかなる四肢の構造、輪郭の形状、形態、からだつきが人間のそれよりも美しいといえるだろうか」ND. I 47

「人間の姿がすべての魂ある存在のなかで、最も優れた形をしているから、他方で神々が魂をもつ存在であるのなら、神々は万物の中で最も美しい姿をしていることになる……その理性は人間以外の姿においては存在できないのだから、神々は人間の姿をしているとみとめねばならない。」ND. I 48

論拠としてはいずれも強いものではないが、ここに人間中心主義だけをみるのは適当ではないだろう。原子論においては、すべては偶発的な経過をたどって変化していく。物質界をメタレベルで統御するものは存在しない。人間も神々も自然的過程のなかで出現してきた存在者たちである。ここではむしろ古代原子論者たちのダーウィン主義的側面（収斂進化）を見て取るべきであろう。

コッタが神人同形説を否定したいのは、理性をもつ存在を人間形に限定させたくないということにつきる。正則な運行をみせる星辰自体に神性を帯びさせたいのであり、理性的なものの発現をそこに認めたいからであった。逆にエピクロスはこうしたプラトン的な星辰神論を完全に否定する。天体現象は非生物的な物質現象にすぎないため、神々とは何ら関係することのないものだった。

ルクレティウスも星辰が永遠に存続するものではなく、生成し消滅してい

く物質現象そのものであると謳っている。さらにこの世界自体も原子から生成したものでありいずれ、解体、離散していくという世界の終末を原子論からの、つまりは自然哲学からの帰結としてたびたび語っている。

エピクロス派は一つの世界／宇宙ではなく、無限の拡がりを持った万有（τό πᾶν）[6] のなかに出現している無数の世界の一つ一つが生成し消滅していくものととらえているのである。そのように転変する諸世界すべてを含む万有のなかには、無数の原子のあらゆる組み合わせが、そして可能となる世界のすべてが包含されていると考えられている。「あらゆる組み合わせを原子は試みている」（ルクレティウス）のである。

このような「実験」のなかから神々も生まれてきた。ヒューマノイド型の知的生命体で、分解、解体を免れた、あるいは克服した特別な原子集合体として神々は現れる。そのような物質形態が万有のうちには在りうるのであり、それこそが神であるとエピクロス派は主張しているのである。原子集合体として物質的に永続性を出現させることが可能であるということでもある。明らかに原子論に対立する反原子論的存在が、エピクロスの神なのである。
だが、そのような存在は可能なのであろうか。そしてその存在はどのようにして認識され確信されるにいたるのであろうか。

2. エイドーロン

エピクロスにとって知るとは明瞭であることであり、不明瞭なことを明瞭なことに関連付けることで明瞭性（ἐνάργεια）を得ることである。何を知るかといえば真理を知ることである。そして真理は感覚に明瞭なものとして現れることができる。そのためエピクロスは感覚を真理の規準（κριτήριον τῆς ἀληθής）と呼んでいる。対象をありのままに写し出すことができるのが感覚の特徴であり、この感覚のもつ特性によって我々は対象世界の姿を我々自身に映し出し、現前させることができる。

感覚のもつ真理性は、自然学的にも、つまりは物質過程によっても説明される。対象からは、その形状や色や質感を伝える薄い原子集合体が常に放射されているとして、これを射映像、エイドーロン（複数形でエイドーラ εἴδωλα）と呼ぶ。対象表面から放射されるエイドーラは感覚器官に進入して魂に刻印する。そのとき魂は表象（φαντασία）を得る。このエイドーラという仲介物質の存在はエピクロス以前にデモクリトスによって提唱された

古代原子論を特徴付けている概念である。エイドーラはあらゆるものから常に放出され続けるために空間にはエイドーラが充満している。古い時代の像や遠隔地の像も含まれる。デモクリトスやルクレティウスの記述によるとエイドーロン同士が絡みつくことで新たな複合表象を生じさせる（ケンタウロスやキメラなどの表象)。さらには死んだ人の姿を見ることも過去に放出されたエイドーラの存在によって説明される。また夢に現れる様々な像もこれらが絶えず進入しているために引き起こされていると考えるのである。

では膨大なエイドーラに曝されながら、なぜ我々は特定の像を見ることができるのか。ルクレティウスによると、心がそこに注意を向けるからだという。また、ある事柄を思い浮かべるときに像が現れるのも同じようにその像をすくい上げているというのである。

つまり古代原子論が導入したエイドーラは、通常の物質世界から相対的に独立した希薄なエイドーラというもう一つの世界を出現させることになった。そしてこのエイドーラ界は、ルクレティウスが示すように感覚知覚に限定されず、表象世界に直結する特徴も持っている。眠っている時のように魂の一部が休止している場合は、エイドーラの流れに曝されることになり、様々な表象が湧出する。神々の表象もそうした夢のうちに現れていることをルクレティウスは古代人の心象世界として描いている。

じっさい、そのときまでに死すべき者どもは、目覚めているときにも／神々の巨大な顔を見ていた／とくに夢の中では驚くほどの大きさの体のものをみた／……輝くばかりの顔と測り知れぬ力とにふさわしく、／そして彼らに、永遠の生命を与えた……／そのうえ、幸福においても遥かにまさっていると考えた。(RN. V 1169–1179)

このルクレティウスの記述は、エピクロスの神々の特徴が人類の黎明期にすでに現れていたことを語るものである。[7] 生きものとしての神々という観念は、人類の歴史とともに古くからあるという主張であろう。そしてその観念は、エイドーラを通して与えられ、「神」という語を発すれば一連の表象が現れるようになっているのが人間なのだというのである。エピクロスが「神々についての共通観念」といっているのがそれであろう。古代からもっていた神々についての原初的な表象から、「永遠の生命」と「幸福」とを神々の認識における「明瞭なるもの」として抽出したのだといえよう。このような共通の観念としてあり、明瞭なる認識でもあるものをエピクロスは先取観

念（πρόληψις）と呼んで、真理の規準の一つとしている。[8] 先の神々についてのエピクロスの発言は、〈神々は不滅であり至福なる生きものである〉という観念は先取観念としてすでに我々がもっているものであり、それを思い出して吟味してみよと語っていたのである。

ここでエイドーラについてデモクリトスとエピクロスの違いを確認しておこう。テオフラストスによるとデモクリトスは「視覚器官と視覚対象の中間にある空気が、視覚対象と視覚主体によって圧縮されることによって刻印される。なぜならつねにあらゆるものから何らかの流出物が発出しているからである」DK. Democritus, A.135.50 としているとし、「デモクリトスは（対象の）形態をはこぶ流出物を想定しながら、なぜ（空気に対する）刻印を主張しなければならないのだろう。というのはエイドーラはそれ自体直接に反映されるからである」DK. Democritus, A.135.51 と疑問を呈している。また、プルタルコスは「個々人の魂における変動や意思、品性や情念の影像をも把握して引き連れていき、それらを伴って進入すると、あたかも生き物のようにエイドーラを放射した当のものの思いなしや論理や情動を、その受け手に対して語りかけ、報告するのである」DK. Democritus, A.77 と伝えている。

デモクリトスのエイドーラは、空気に刻印して空気を担い手にさせるとともに、放射する側の情動も盛り込まれているところにその特徴がある。エイドーラのなかには善をなすものもあれば悪をなすものもあるともされていた。こうしてみるとデモクリトスのエイドーラはある種の倫理的主体として生きものの性質を帯びていることがわかる。それは魂の原子を含んでいることを意味する。魂の原子と微細な原子の複合体としてエイドーラをとらえているのである。魂の原子と物質原子の複合体という観念は、遺体に魂の原子が残存するという彼の主張とも符合する。

これに対しエピクロスは、魂粒子は生きものの身体とともにしかありえず、身体が致命傷を負えば流出してしまい残存しないと考えている。もちろんエイドーラが魂粒子を含むことはできない。エピクロスにとってエイドーラは生命とは別の物質形態である。またエピクロスのエイドーラは空気と特別の関係はもっておらず、感覚器官とのみ関わりを持つものだった。そしてそれは空気のない空間へも進んで行くことが可能なのである。

両者のエイドーラ概念の違いは、神概念に反映されることになる。

3.　神の物理学か認識論か

古代原子論は魂も原子からなるものとして、身体機能から精神活動まですべてが原子によって説明されると考える。魂を構成する原子の中には、心の動きの素早さに対応した極めて小さく球状をしたものがあるとルクレティウスが説明するように、魂は身体などの通常物質を構成する原子よりも一段と小さく軽い原子から成り立っている。この原子の挙動によって感覚や思考などが可能になる。

では、先に述べたエイドーラはどのような原子から構成されているのであろうか。可能性は二つある。対象となる物質から、その物質表面の原子の一層か二層がそっくり剥離して放出されるとするか、あるいはエイドーラを担う別の原子群が物質中にあってそれが放射されるとするかである。エイドーラについてのエピクロスの説明では、その希薄性のみが強調されているため決定することが難しい。しかしエピクロスは、「この表象されているものが固体の形態であって、それはエイドーロンが次々に凝集することによって、あるいは残存していることによって、生まれたものなのである」DL. X 50としている。これは我々のもつ表象は魂に取り込まれたエイドーラが凝集したり残存したりすることの産物だというのであるから微量とはいえ魂の内部を通常の物質原子が入り続けていると考えるのは困難であると思われる。ルクレティウスの記述も微細な粒子であることをうかがわせる。こうしてエイドーラは魂を構成する原子に近い大きさを持つ原子（ルクレティウスは心を、風、空気、熱と名前のない第四のものから構成されているとしている）から成り立っているのではないかと推定してもいいだろう。エイドーラが通常物質の原子とは別の原子からなるものとすれば、空間に膨大に放射されていても通常物質との関係を乱すことを心配する必要はなくなる。

以上のことから、原子は相対的に独立した機能に応じて三種類に類別できることがわかる。通常の物質を構成する原子、魂を構成する原子、そしてエイドーラを構成する原子である。エピクロスの語る世界には、これら以外の原子の類を推定させる記述は見出せない。生きものとして万有のうちに存在する神々は、これらの原子から構成されていることになる。そして神々という原子の集合体は、「不滅」でなくてはならない。いかにして、そのようなことが可能であるとエピクロスは、そしてエピクロス派は信じられたのであ

ろうか。

ここで手がかりとなるのは、エイドーラのもつ奇妙な性質である。エイドーラは原子集合体から常に放出され続けるものとされていた。放出されているのは原子である。たとえ数が膨大であるとしても集合体に内包されていた原子はいずれ必ず消尽される。エイドーラ説を採る限り、対象世界はいずれ不可視になるとするか、放射して失った原子は補充されると考えるしかない。エピクロスは「物体の表面からは絶えず流出が行われているのであるが、このことが物体の大きさの減少という形で眼に見えるものとならないのは、失われた部分は別のアトムが補充するからである」DK. X 48 と述べている。

物質を放出しまた取り込むということは、生物についていえば代謝活動による恒常性の維持であり、広くいえば物質循環ということになろう。ルクレティウスは生物の同化作用や代謝活動について原子論的に詳しく語っている。そして老化や死について、代謝活動の衰えによって流出物が増えることと、外部からの打撃によって恒常性の維持ができなくなって分解していくと説明している。(RN. II 1120 ff.) であるとすれば、物質循環が完全であるならば生物はその恒常性を維持し続けられることになる。神々の「不滅性」とは、それを実現することを要求している。

またルクレティウスは心の可死性を語るなかで「不死なるものは、その部分を入れかえたり付け加えたり、わずかでも失うことを許さないのだから」III 517-18 と述べている。一方、「聖なる身体からでる像、人間の心に、神々の姿を伝うるそのものを」IV 76–77 とすることから、神々の身体からエイドーラが放射されている以上、補充がない限り「不滅」であることはできなくなる。「不死なるもの」は「わずかでも失うことを許されない」のだとすれば、神々の身体から放射されたエイドーラは、失うと同時に補われなくてはならない。エイドーラ原子はエイドーラ原子を押し出すような特別な仕組みを持っているということになる。エイドーラは即座に補充するという特性をもっているとしなくてはならない。神々は生きものであるから魂―身体という構成をもつ。そして人は神々の表象をもっている以上、神々はエイドーラを放射している。つまりは原子集合体の身体を持っている。では神々は魂の原子、エイドーラの原子以外に通常の物質原子を持っているのであろうか。

キケロに登場するコッタは「彼（エピクロス）は、消滅や分離につながる個々の原子結合を神々に認めることを避け、神々には身体は存在しないと述

べた。すなわち、神々には「身体ではなく、身体のようなもの」がまた「血液ではなく、血液のようなもの」があるだけだというのである」ND. I 72と述べている。「身体のようなもの（quasi corpus)」、「血液のようなもの」の解釈の可能性は２つある。身体は通常物質からできているが、身体の組織化が異なっているとするか、身体の組織化は同じだが構成原子が異なっているとするかである。

通常の物質原子によって知的生命体を人間とは異なった形で組織化する可能性は否定できないであろうが、エピクロス派は神々を人間と同じ形をしたヒューマノイド型の知的生命体と確信しているため、前者の可能性はほとんどない。従って神々の身体は、通常の物質原子ではないものから構成されているとするしかないであろう。また魂は、それだけで存続することはできずに、何かによって包まれていなくてはならないと主張するのだから、魂の原子とも別のものである。残るのはエイドーラの原子しかない。[9)]

このような推論によれば、神々はエイドーラを構成する原子によって組織化された身体をもつとしなければならない。エイドーラを構成する原子によって、そのような組織化が可能であるのかどうか、またどのように身体として機能しているのかは全く不明である。

ただ、エイドーラという物質は通常物質の組成を写しとり、その擬体（シミュラクル）として存在する。これをさらに敷衍すれば身体の器官のすべてについて擬体をつくり、その関係性までも仮構（シミュレート）する可能性は排除できない。通常物質の流入、流出なしにエイドーラだけでそうした流れがあるかのように、過程を完全にコピーし再現してみせるということも想定されよう。こうしてエピクロスの神は原子論上の仮現論（ドケティズム）ともいうべき様相を帯びることになる。

さらに、このように解釈された神の身体論はデモクリトスの神の像に近いものでもある。デモクリトスが神をどう考えていたかは、無神論であったかどうかを含めて明らかではないが、神的なものの存在は認めていた。それは彼の考えるエイドーラであった。先に見たようにデモクリトスのエイドーラは魂の原子を含んでいたし、感情をもつものだった。これは、単純なエイドーラの身体を持っているとみることもできる。エピクロスの神が先に推論したようなものであるすると、それはデモクリトスのエイドーラの性質を拡張したものになっていることが判る。ただし、エピクロスの神々はこの世界から

離れた間世界（μετακόσμια）[10] へと移行され、そこでエイドーラの身体をもって局在し、自足して地上への介入は一切なさないという対照的な性質へと転じているのだが。

また次のことにも注意しなくてはならない。神のエイドーラが魂に流入することによって、神の先取観念は形成され、魂のなかで像として保持される。エイドーラの補給によって先取観念となった心像の恒常性は維持される。他の表象と異なり、先取観念として魂の内にある神の表象と物理的存在としての神とは、対象そのものとその忠実なる写しとしての表象という関係を越えて、両者は同一性へと収斂している。人に先取観念としてある神の観念は明瞭であるばかりか、そこに神が臨在しているとさえいいうるほどになっている。これも神の身体がエイドーラからなっている場合に特有のことである。[11]

4. 至福性

エピクロスの神の特性である至福性とはどのようなことをいうのであろうか。[12]

彼は端的に「すべての選択と忌避とを身体の健康と魂の平静さとに関連付けること可能にするからである。けだしそのことこそが至福なる生の目的なのだから」DL. X 128 と述べている。至福なる生とは、身体が健康で魂に動揺がない状態で生きていることをいうのである。さらに続けて「その目的のためにこそ、つまり苦痛を感じることもなく、恐怖にかられることもないようにするために、われわれはあらゆることを行うのだから」、そして「われわれは快楽（ἡδονή）を、至福なる生の始めであり、また終わりであるいっているのである」と結んでいる。

われわれは、というよりもすべての生きものは不快を避け、快を選びとる、これはなぜかではなく、そのような物質集合体が生きものだというのがエピクロスの出発点である。「明瞭さ」が真理性の規準の主観的側面であったとすれば、善においては快がその役割をになうと考えてよい。快であるものが善なのである。生物は快をたどって生を続けていく。人間には配慮（φρόνησις）にしたがって、あえて不快なることを選択する場合もあるが、それとて大きな快を目指してのことである。エピクロスは不快を避けることを快を選択することと同じように重視している。これはエピクロスの求める

快が、いくらでも増強、強化できるものと考えられていないことと関係している。彼のいう快楽には上限がある。そしてそれはすべての不快がないことなのである。身体でいうならば無痛（ἀπονία）であり、魂でいうならば動揺のないこと（ἀταραξία）がそれである。つまり、快楽の上限とは先に見た至福性のことにほかならない。

ところで神々は身体的にみれば完全な健康状態にある。不滅である身体は完璧なる恒常性を保持しているからである。従って残るのは、魂の快楽上限である無―動揺をどう実現しているかである。エピクロスは、人の心に動揺を与える最大のもの、最大の恐怖として、いいかれば容易に取り去ることのできない恐怖として、死の恐怖と神々による懲罰を考える。これに対し神々にとって身体は不滅であるために死は存在しないし、神々の懲罰というものも神々にとっては意味をなさない。神々には魂を揺るがす最大の原因が存在しておらず、残されているのは世界と関わることからくるわずらわしさだけだというのがエピクロスの考えである。そして、そのようなわずらわしさに本来的に幸福な状態にあるものが関わろうとするはずがない、とするところにエピクロスの神に対する考えの特徴がある。

世界を創造したり、統御したり、人々の訴えを聞いたり、褒めたり、怒ったり、処罰したりといったことすべては世界と関わりをもつことであり、労苦を伴うものであるから、至福性にある神々はそのようなことを一切行うことはない。不滅な身体をもつ神々は世界と一切関わらないことによって完全なる快を現実化させる。エピクロスの神は世界に対し非介入、無関与、無関係であることによってのみ存在する。それは一種の無神論であり、神があるかのように装っているだけではないかという批判が常についてまわっていた。[13] 世界から身を引き、一切の関わりを避けた隠遁者は存在するといえるのか、と。神とは摂理をもたらし、敬神の念篤いものには報いを与え、非道のものには死後にも罰を加えるものだとする人々にとってエピクロスは無神論者である。しかしエピクロスにとって、そうした神（の）話を破壊することが人々の救いであるのだった。人間は死を恐れる。そこで魂は死なないと思い込めば今度は死後に神の懲罰が待っている、という恐れがまた生まれる。このような恐怖を裁ち切るのが彼の自然哲学であった。死の恐怖のもとには苦痛への恐怖がある。しかし苦痛は感覚が生み出すものであり、死のときには感覚器官自体が分解するので苦痛も消失する。身体が壊れはじめれば

魂はたちまちに流出し離散してしまう。魂の存続もなければ死後の生というものもない。当然、神々による懲罰を受けることもない。また神の摂理もない。すべては原子による偶発的な衝突によってのみ生じる。無数に存在する世界のなかで、たまたま摂理があるかのようにみえる世界のなかにわれわれは在るにすぎない。そしてこの世界もわれわれと同じようにいずれ分解していく。このような教説によって恐怖から根本的に解放され、心の平安が得られると考えるのがエピクロスの徒である。

死の恐怖と神々からの懲罰の恐れという魂の動揺をもたらす根本原因を離断するためには、神々の無関心、無介入は不可欠の条件であった。神々はただ単に永遠であるだけでは不十分であるのだ。原子や空虚も永遠的で不変な存在である。しかし原子は幸福を感じることはできない。完全なる理性、永遠の理法ではなくエピクロスは永遠に完全なる幸福を実現していることを求めている。そのために神々は身体を持っていなくてはならないのだった。身体と魂の連携のなかにしか快は存在しないからだ。そして快のために神々は世界に介入することはない。神は世界に関わることがないために幸福であり、人々は神が世界に関わることがないために幸福となる。非介入は幸福の最大化、快の最大化をはかる神の配慮である。そしてこのような教えを説いたエピクロスを人類の救済者であり、「神」であるとルクレティウスは謳う。(RN. V 1–54) 人々を苦しみから解き放つものは、古来神として崇められるものだから。

神々ははるか彼方の空間に実在している。その神々をわれわれは人類すべての心の内にある先取観念を省察することでありありと知ることができる。そしてその姿はわれわれの生の理想の姿としてわれわれの生を導いていく。このような図式を自覚的にたどる者をエピクロスは、知者（σοφός）と呼び、「人々のあいだにあって神のごとく生きることになろう」DL. X 135 と述べるのである。そのような人は不滅の身体を持つことはないが「(その人は)幸福にかけてはゼウスとさえ競いうるであろう」[14] といわしめるまでの状態に到ることができる。それは幸福というもの、快というものに上限が存在しているからであり、その最大の快が何か特別なものの獲得ではなく、苦痛と不安のないことだったからである。

神々は幸福を感じるために人間の身体を仮構した微細な身体を持っている。エピクロス派における知者とは、幸福さにおいて神々と同等になりうる

者ではあるが粗大な物質的身体をもつがゆえに時間が限られたものである。これを一過性の神、物質的に仮構された神であるということもできるだろう。人を神と同一視するような思想も、彼らが神々に対して与えていた役割からすれば尊大でも冒瀆でもない。すべては「自然は自然を楽しみ、自然は自然を支配し、自然は自然に打ち勝つ」[15] のもとにあるのだから。

5. 原子論のなかの神的なるもの

エピクロスは偶然的に離合集散を繰り返す無数の原子の群れなす万有のなかに、変わらずあり続ける集合体の存在を直覚できると信じていた。そのことを可能にしたのはエイドーラという古代原子論に特有の観念にあった。現在のようにそれを光学的像とみてしまえば彼の神論は一気に瓦解する。しかしその神の不可能性は、エピクロスの神の抹消であり原子論を直ちに素朴な唯物論へと帰着させるというものでもない。彼は原子の世界に神的なものの可能性を感じとっていた、あるいは神的なものの物質的表現の可能性を感じとっていたとみることもできるからである。エピクロスにとって神的なものの可能性は、生きているもの、生物のなかに見てとれるものだった。エピクロスは生きものの特性を生命や魂といった非物質的なものに求めることはない。「生きもの」という存在が特別であるのは、快・不快を通して取捨選別し自己組織を保持しようとするかのように物質を制御している特別な原子の集合体であるからだった。物質の代謝によって、あるいは同種の原子の置換を通して集合体の同一性が保たれること、そこにおいてのみ原子論における集合体の永遠性への鍵が秘められていることを見てとったのである。この意味で生きものは不完全な神となる。そしてエピクロスの神論とは、原子論における生物という存在の不思議を解き明かすこととほとんど同義なのである。そこに現われ、幻視される理想生物が通常の神と呼ばれているものと合致するかどうかが問われるべきなのではない。原子の世界において生物が特異な可能性をもつ存在としてありうることを提起しているのである。

註

1) エピクロス哲学の近世までの展開については、Jones が概要を与えている。ガッサンディによるエピクロスのキリスト教世界への導入については、Osler を参照。

2) DL. X 27 にはエピクロスの著作目録が掲げられている。本稿においてエピクロス以外に、キケロ、ルクレティウス、ピロデモスという三人の同時代人を参照している。これは前 1 世紀ナポリ周辺を中心にしたエピクロス派の活動と関係している。その中心にいたのがピロデモスである。シリアのガダラ出身とされるこの哲学者・詩人はシドンのゼノンのもとでエピクロス哲学を学んだ後に、富裕ローマ人の別荘地であるナポリに現れる。そこでシロとともにエピクロス哲学の学校を開く。このときの彼らの支援者がカエサルの義父でもあるピソであった。ピソのエピクロス的傾向を批判するのがキケロである。キケロのエピクロス派批判は、晩年の「神々の本性について」や「善と悪の究極について」などで展開される。そこで参照されるエピクロス派の資料は、ピロデモスの著作ないしはピロデモスと共通する何らかの著作であると推定されている。キケロはピロデモスとシロのエピクロス派を念頭にエピクロス批判を行っていると考えられる。またルクレティウスはほとんど関連する資料がない人物である。ただピロデモスがその著作を献じているガイウスが、「事物の本性について」で言及されるガイウス・メンミウスであるとすればルクレティウスもこのグループの近くにいたとすることもできる。またこの派の教師シロのもとではウェルギリウスが学んだことも知られている。そしてヴェスヴィオス山の噴火によってポンペイとともに火山灰に埋もれたヘルクラネウムから発掘された「パピルスの館」と称される（ピソの邸宅の一部ではないかとされる）建物跡からは多数のパピルスが発見されている。ピロデモスの蔵書とも推測されているこのパピルス群には、エピクロス自身の著作やピロデモスをはじめとするエピクロス派の著作が多数含まれている。

3) 本稿に引用するテクストの訳文はすべて末尾に掲げた訳書から採用させていただいた。エピクロスの主要テクストはディオゲネス・ラエルティオス（DL）に収録されているため、エピクロスの引用は DL で指示する。DL に含まれるエピクロスの訳文は加来訳に従っている。

4) エピクロスの神をめぐっては多くの議論が重ねられてきた（Scott, Philippson, Bailey, Kleve, 西川他）。エピクロス自身の論考が残されていないためにエピクロス後の人々の証言（多くは批判者）によらざるをえない。基本となる資料はキケロの『神々の本性について』（ND）とヘルクラネウムで 18 世紀に発掘された炭化したパピルス群、とりわけピロデモスの著作断片である。問題の中心となるのは、ND. I 49－50 と 105 および 109 の神についての認識に関わると思われる部分の解釈で

ある。写本の異同を含めて、この部分の解釈は極めて難しい。またこの部分と並行しているように思われるピロデモスのパピルスも、字形の判読による異読の差が大きいうえ、その断片性のため意味をとることにも困難をおぼえる。このことは例えば最新版 Obbink の De pietate の登場によっても変わることはない。このことをふまえて本稿では文献学的な接近を一時断念し、エピクロスの教説に含まれている自然学的な接近を援用しこの問題を考えるという方法をとる。第 3 章はその一つの帰結である。

5) キケロはエピクロス派のウェッリウスを登場させてエピクロスの神の特徴を述べさせている。そこでは「神々は幸福であり不死である」(deos beatos et immortales) また「神々は永遠であり幸福である」(aeternos et beatos) と表現する。

6) 万有（ト・パーン）とは、宇宙（コスモス）のことではなく諸宇宙の全体をいう。現在の多宇宙（マルチヴァース）と共通性をもつがそれにとどまらない。例えば一つの宇宙においてとりうる可能性すべてが各々に実現している無数の宇宙の全体でもある。この場合は量子論の多世界解釈に近い。つまり万有とは、多宇宙の多世界すべてを含めた巨大な集合を指している。

7) 古代より人類の心性に埋め込まれたかのような観念として、神々の特性についての観念を正当化しようとする手法は、エピクロスの失われた著作『自然について』第 12 巻に既にあったことがピロデモスの著作から推定できる。

8) キケロに登場するウェッリウスは、エピクロスが提唱した新概念として「プロレープシス」(先取観念) を紹介し、praenotio ないし anticipatio という訳語をあてる。ディオゲネス・ラエルティオスはこの観念について「一種の直接的把握、または、正しい思いなし、あるいは心像、ないしは、貯えられている普遍的概念……いいかえれば、外界からしばしばわれわれに現れたものについての記憶」DL. X 33（“エクソーテン”の訳を“外界から”に変えた）だとしている。

9) ルクレティウスは「その神々の住居は私たちの住居とは違い、彼らの体と同じく希薄であるにちがいない」と推定している。希薄性はエイドーラの特性としてエピクロスが挙げるものだった。また、キケロに登場するコッタはエピクロスの神を批判するポセイドニオスを引用している。「神を不具者のようなものー単に輪郭をもつのみで確かな実体をもたず、すべての点で人間の身体と同じつくりをしているが、それを用いることはまったくなく、繊細で透き通る姿をしており……」ND. I 123 このポセイドニオスの伝えるエピクロスの神の姿の証言は貴重である。そしてエイドーラからなるとすることとも矛盾しない。

10) 諸世界（多宇宙）の間に拡がる原子密度の低い巨大な空域をいう。ラテン語では intermundia。そこに神を配置することは、ヒュッポリトスも『全異端論駁』でエピクロス派の特徴の一つに挙げている。

11) Long and Sedley はエピクロスの神を心的な存在であり、外界に実在するとしたの

は前 1 世紀のエピクロス派であるとする。これは理解しやすく残存する文献との矛盾もない。だが、エピクロスの神はもう少し微妙である。観念論と唯物論の中間としてエイドーラが存在しているからである。もちろんエピクロスにとっては物質であるが、エイドーラを否定するものにとっては観念でしかない。しかも神の身体はエピクロス派にとっても特殊な物質形態であって、先取観念という魂内部での物質状態と相同であった。エピクロスの神の実在性はエイドーラの存在にかかっていた。

12）以下においては、エピクロスの「快楽主義」として知られる内容を扱っている。「メノイケウス宛書簡」（DL. X 121－135）と「主要教説」で表明されているエピクロスの倫理的教説は、人間に限定されるものではなく生きものの行動原理ともなっており、神々のふるまいをも射程に入れるものである。ここでは、その倫理性が人間にとっての救済の可能性を拓くものであることを明示するよう再構成を試みた。

13）先にも引いたポセイドニオスは「エピクロスはいかなる神の存在も信じなかったのであり、彼が不死なる神について語っていることは、自分への批判をかわす目的で言及しているに過ぎない」ND. I 123 と批判していたというのである。

14）『ヴァチカン箴言集』33 出・岩崎訳『エピクロス』に収録されている。

15）擬シュネシオスの引用するオスタネスの言葉。DK. Democritus, B, 300.17 錬金術に関連した擬デモクリトス文書でオスタネスの格言としてしばしば引用され、いくつかの異形がある。ペルシャ系のマゴスでデモクリトスの師ともされるオスタネスのこの言葉は、原子論の古代世界においてもつ意味をよく表している。超越的でなく内在化され自足した世界としての物質界は、エピクロスの神をもたらすとともにそれとは別の錬金術の入り口ともなっている。

テクスト

Usner, H., *Epicurea*, Leipzig, 1887. (= DL)
Arrighetti, G., *Opere di Epicuro*, Torino, 1973.
Pease, A. S., *M. Tulli Ciceronis De natura deorum liber primus*, Cambridge, 1955. (= ND)
Bailey, C., *Lucreti :De rerum natura*, Oxford, 1900. (= RN)
Diels, H. and Kranz, W., *Die Fragmente der Vorsokratiker*, Berlin, 1954. (= DK)
Diels, H., *Doxsographi Graeci*, Berlin, 1879.
Obbink, D., *Philodemus's On Piety*, Oxford, 1996.

翻　訳

ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』（下）（加来彰俊訳）、岩波書店、2000 年。（= DL）
エピクロス『エピクロス　教説と手紙』（出隆、岩崎允胤訳）岩波書店、1959 年。
キケロ「神々の本性について」（山下太郎訳）『キケロー選集 11』岩波書店、2000 年、1－273 頁。（= ND）
ルクレティウス「事物の本性について」（岩田儀一訳）『世界古典文学全集　21 ウェルギリウス・ルクレティウス』筑摩書房、1965 年　289－431 頁。（= RN）
『ソクラテス以前哲学者断片集』第Ⅳ分冊、（内山勝利訳）、岩波書店、1998 年。（= DK）

参考文献

西川亮『古代ギリシアの原子論』渓水社、1992 年。
Bailey, C., *The Greek Atomists and Epicurus*, Oxford, 1928.
Bidez, J. and Cumont, F., *Les Mages Hellénisés*, New York, 1975.
De Lacy, P. H. and De Lacy, E. A., *Philodemus: On methods of Inference*, Napoli, 1978.
De Witt, N. W., *Epicurus and His Philosophy*, Minneapolis, 1954.
Festugier , A. J., *Epicure et ses dieux*, Paris, 1968.
Fischel, A. H., *Rabbinic Literature and Greco-Roman Philosophy*, Leiden, 1973.
Gigannte, M., *Philodemus in Italy,* Ann Aber, 1995.
Jones , H., *Epicurean Tradition*, London, 1989.
Joy, L. S., *Gassendi the atomist*, Cambridge, 1987.
Kleve, K., *Gnosis Theos*, Oslo, 1963.
Long, A. A. and Sedley, D. N., *The Hellenistic Philosophers*, Cambridge, 1987.
Mansfeld, J., “Aspects of Epicurean Theology”, *Mnemosyne* 44, 1993, pp.172-210.
Osler, M. J., *Divine Will and The Mechanical Philosophy*, Cambridge, 1994.
Philippson, R., *Studien zu Epikur und Epikureern*, Hildesheim, 1983.
Rist, G., *Epicurus: an Introduction*, Cambridge, 1972.
Reale, G., *The Systems of the Hellenistic Age*, Albany, 1985.
Scott, W., “The Physical constitution of the Epicurean gods”, *The Journal of Philology* 12, 1883, pp.212-247.

Epicurus' God and Salvation in Atomism

by Mitsutoshi SASAKI

In this paper, first a review of Epicurus' atomist ontology is put forth. Then, an inconsistency between the atomist ontology and the eternal existence of the gods is examined. An explanation of how Epicurus resolved this through introducing the concept of the mediating material, eidolon, is then given. The relationship that this concept has to the nature of the gods and its subsequent effect on human beings and their salvation is examined further.

Epicurus, as an atomist, puts forth a very simple ontology. Only atoms and the void have a real existence, every other thing is a composite of them, and all the qualitative features that appear in our senses have no reality in truth. They are just a by-product in the processes of our perception.

Epicurus, however, claims the existence of the gods, who are indestructible and blessed. In other words, the gods are eternal and the happiest of living beings. His claim, *prima facie*, leads to an inconsistency. Along his ontology, no eternal thing exists except for an atom itself, and aggregated things can be deconstructed and dissipated into atoms. How could he believe then in the existence of eternally aggregated matter in the case of the gods? One possible way to avoid the destruction of a god's body is to assume his body is made from an exceptional kind of atoms.

For their epistemological purpose, Greek atomists introduced a unique material form by which objective surface information is transported to the observer precisely. They call this mediating material form of atoms *eidolon*. All aggregated matter emits or radiates *eidola* constantly into space. These kinds of atoms are different from those atoms in ordinary matter and souls. To keep on the appearances, the atoms that are shed must be compensated for and supplied in the form of the same kind of atoms. It is this supply

system or material circulation that assured the maintenance of a long term existence in the form of aggregation. Furthermore, the gods are eternal because of their capacity for complete material circulation.

In addition to being eternal, the gods enjoy the happiest life of all, and because of this, they also will not intervene in the world at all. Detached and far away from the world, they live in the inter-worlds and are satisfied to be by themselves. By way of their indifference to our world, we are freed from our fear of the gods, which is one of the basic fears of human beings.

Epicureans believe that to disclose the nature of the gods and the reality of death leads us to be liberated from fear and to pass life happily in time as the gods do.